

論文

上級日本語学習者の論文に見られる格関係の誤用について

中 嶋 容 子*

要旨

本稿では、上級レベルの日本語学習者に見られる語法の誤用を、学習者が一定の習熟度に達し、形成された文法ルールから構造的に表れた誤用と捉え、この観点から上級学習者が作成した専門論文の下書きに見られる「が」を中心とする格関係を表示する助詞について誤用を分析した。

その結果は次の通りである。1)「が」と「の」に関する誤用は、「誤用→正用」で表した場合、「が→の」「の→が」のいずれのタイプも同じ程度見られ、混用と見做すべきものである。どういう場合に「が」と「の」が交替し得るかの習得は不十分ながら、交替することがあるという知識がこの混用を招いていると考えられる。2)「が」と「は」に関する誤用は「が→は」と「は→が」のタイプに分けられ、「は→が」の誤用の方が多く見られる。「が」と「は」については、「は」が表す特立への不注意、あるいは誤解によるものが多いと解することができる。また、「総主語Aは小主語Bが～」の形式が選択を誤らせている可能性も考えられる。3)「が」と「を」については、いずれも述語動詞の自他やヴォイスに関わる誤用であるが、「が→を」に関しては、ここでも「総主語Aは小主語Bが～」の形式が混用を惹き起こしていると考えられる。また、連体節であることが、目的格でも過剰に「が」を使用する要因となっている可能性がある。4)「が」と「に」の例は少数であるが、「が→に」に関しては、やはり連体節において「が」を使用する混用が認められる。「に→が」については、受身形となった場合の助詞の交替についての誤解が混用を招く要因となっていると考えられる。

このように、上級学習者にあっては、その内部で形成された、正用とは別の規則を適用するという構造的な要因によって誤用が生じていると判断できる。

キーワード

上級日本語学習者 アカデミックライティング 格助詞 格関係 誤用 混用
連体節

* 立命館大学非常勤講師

目 次

1. はじめに
2. 調査対象と方法
3. 連体節における「が」と「の」
 - 3.1 「が→の」
 - 3.2 「の→が」
4. 連体節における「が」と「は」
 - 4.1 「が→は」
 - 4.2 「は→が」
5. 「が」と「を」, 「が」と「に」
 - 5.1 「が→を」「を→が」
 - 5.2 「が→に」「に→が」
6. まとめと今後の課題

1. はじめに

本稿では、中国語を母語とする上級日本語学習者が日本語で書いた経営学分野の論文の下書きを対象に格関係の誤用を調査し、そこに見られる語法上の問題点を示す。

文字や用語そして語法の誤用は、日本語学習者に広く見られるものである。そこには、単に適切な語を知らないために起こる語彙的な知識不足のように、主として初級学習者に見られるものもあるが、上級学習者に限れば、まず見られないものである。上級者の誤用は、語法的なことに関わる場合が多い。それは単なる知識不足というよりは、かえって知識があるためにその適用を誤ってしまうものであり、学習者なりのルールから生じた構造的な誤用であると考えられる。

一例として、ある学習者のレポートの下書きに現れた格助詞「を」と「に」の誤用を挙げる。

- 1) しかし、商品の外見だけでは消費者に満足させない。
- 2) 心地よい商品にいい評判を得れば、消費者に満足させると、顧客関係が築けると考えられる。

これらは、いずれも「消費者を満足させる (させない)」とあるべきところを、「消費者に」としている。つまり、「に→を」と訂正すべき例であり、動詞と共起する格助詞の誤りであるように見える。次に、同じ学習者の「を→に」の例を挙げる。

- 3) 「デザイン」の視点で商品品目と管理を言及する。

- 4) お茶の飲み方は摘んだお茶の木の若葉を乾燥させ、そのものをお湯で注ぎ¹⁾、飲むことである。

前者は「言及する」内容を「を」で表示した例であり、後者は「<到達点>に<対象物>を注ぐ」を「<到達点>を<対象物>で注ぐ」と誤った例である。

「に→を」「を→に」いずれの誤用例も動詞との共起から説明できるが、述語動詞ではなく格表示された名詞の側に着目すると、また別の傾向を示している。即ち、ヒトには「に」、モノには「を」を付けるという傾向である²⁾。この学習者が使用した「を」と「に」を名詞側から整理すると、表1のようになる。

表1 名詞の種類と「を」「に」

パターン	例数	動 詞 ()内は例数	用 例 *は誤用
ヒト+に	2	満足させる (2)	*しかし、商品の外見だけでは消費者に <u>満足</u> させない。
ヒト+に・モノ+を	2	引かせる・認識する	*顧客に <u>本格的な茶文化</u> を <u>認識</u> し、
ヒト+を	3	アピールする・失う (2)	*パッケージデザインは消費者を <u>アピール</u> し、… 顧客を <u>失</u> ってしまう
モノ+に	6	アピールされる・浸す・基づく (2)・選定される・囲まれる	*建築の歴史に <u>浸</u> すことは中村藤吉の魅力である。 購買・使用経験に <u>基</u> づき、…
モノ+に・モノ+を	4	形成する・付与する (2)・持つ	*ブランドに <u>好</u> き <u>嫌</u> いを <u>形</u> 成する
モノ+を	54	明らかにする (3)・味わう・合わせる・運営する・応用する・オープンする・起こす・行う (2)・改修する (2)・開発する (3)・変える・検証する・紹介する・称する・使用する・調べる (2)・進む・進める・捨てる・創出する・高める・保つ・通じる・使う・伝達する・伴う・取り入れる・とる (4)・入手する・認識する・発見する・販売する (2)・付与する・保護する・保持する・守る・目立たせる・もたらず・用いる・持つ (2)・例とする	効果を明らかにする。 関連商品を開発することである。 各種のお茶の差異を詳しく紹介し、… *スイーツの開発を進みながら… 顧客満足 <u>を</u> 高める
モノ+を・ヒト+に	1	伝える	メッセージを顧客に <u>伝</u> える
モノ+を・モノ+に	2	選定する・する (～を対象に)	老舗茶舗を <u>対</u> 象にし、… 新しい姿を創出した老舗茶舗を <u>研</u> 究 <u>対</u> 象に <u>選</u> 定している

単独で「ヒト+に」となるのは、上述した 1) と 2) の 2 例であり、二重目的語を取る「ヒト+に・モノ+を」「モノ+を・ヒト+に」の 3 例を合わせると 5 例であるが、5 例中、正用は「顧客にメッセージを伝える」の 1 例のみであった。一方、「ヒト+を」は 3 例であり、正用はその内 2 例で、いずれも「顧客を失う」という形であった。用例が少ないものの、「ヒト+に」の正用率は低く、動詞との正確な共起が理解されないまま、明確な基準もなく使用しているようである。

「モノ+を」は単独で 54 例あり、圧倒的に多い。この内、明らかな誤用は「スイーツの開発を進みながら」の 1 例であるが、助詞の誤用というよりも動詞の自他の誤り（「進みながら→進めながら」と考えられる。それに対し、「モノ+に」は、「建築の歴史に浸すことは」「消費者は商品の外見や使い方にアピールされ」の誤用 2 例を含む 6 例である³⁾。「モノ」に関しては「を」で表示する傾向があり、それによって概ね誤用が避けられている。

このように、この学習者の場合、名詞に注目して「に」と「を」の使い分けを分析してみると、ヒトに関してはやや場当たりに助詞を付随させ、モノに関しては概ね「を」を選んでいくらしいことが窺える。

本稿では、こうした学習者なりのルールを手掛かりに、主として連体節に見られる格助詞を中心とする格関係の誤用を取り上げ、その誤用が恣意的なものとしてではなく、それらのもつ語法的な質に即して、一定の規則をもって構造的に現れることを解析する。

2. 調査対象と方法

調査対象は、経営学研究科の留学生向け「アカデミックライティング」の 2016 年度履修生 12 名が授業後半の課題として提出した論文の下書きである。受講生各自のテーマに従い、完成稿は 10,000 字程度となる。今回対象としたのは添削前の下書きであるが、8,000 字から 10,000 字程度の文字数であった。なお、受講生はいずれも中国語を母語とする学習者である。

学習者の使用した格助詞「が」の格関係に関わる誤用のうち、「が」と「の」、「が」と「は」、「が」と「を」、「が」と「に」の誤用例を抽出し、それらの誤用を引き起こす学習者のルールがどのようなものであるのかについて分析する。

以下、用例を挙げる際には、その記述を行った学習者を A～L で表す。また、分析の対象とする誤用以外の誤り（例えば、明らかなミスタッチによる誤字など）は、検討箇所を明確にするため、対象とする誤用と相関関係を持たない範囲で適宜修正して示すこととする。

3. 連体節における「が」と「の」

「が」と「の」の誤用について整理すると、次の表2のようなになる。誤用のパターンを「誤用→正用」の形で表すと、誤用総数は「が→の」が10例、「の→が」が10例となっており、学習者の偏りはあるが、単独の誤用というより相互が絡み合って混用されていると推測できる。

表2 学習者別「が」と「の」の誤用数

誤→正 \ 学習者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	計
が → の								2	1			7	10
の → が						2	3	2	1			2	10

3.1 「が→の」

次に「が→の」の主な例を挙げる。

- 5) 経済の発展とともに、企業が人材へのニーズは昔の学歴型から能力型へと移転した。(H)
- 6) 同じく、ECサイトや携帯アプリを持っているアパレル企業にとって消費者、特に影響力もある消費者が自社に対する評価の重要性は今の時代において言うまでもなく増加している。(I)
- 7) つまり、外国人留学生が日本企業への認識と日本企業が外国人留学生への認識は隔たりがあるのである。(L)

主な3例を挙げたが、「が→の」の10例はいずれも連体節内で起きている。「が」と「は」の対立で言えば、連体節内では「が」が使用されるので、この点は習得されている。だが、動詞を介さない連体修飾節では「の」となるという理解が不十分であるための誤用であろう。この点、6)の学習者Iの誤用に関しては、「対する」という語を動詞と解している可能性がある。それは、学習者Iに留まるものではなく、例えば、次の学習者Lの誤用例8)からも推測できる。

- 8) 外国人留学生の定着促進のための施策は、大学・大学院と政府が外国人留学生に対する施策と企業が外国人留学生に対応する施策に分けて述べている。(L)

3.2 「の→が」

「の→が」の誤用例 10 例の内、次の 9) ~ 14) の 7 例が従属節内での誤用である。13) には一文の中に二箇所の誤用が含まれている。出現順に 13) -1, 13) -2 とする。連体節は 7 例のうち 9), 10), 12), 13), 14) である。

- 9) 数多くの金融機関と IT 企業の提携することにより、積極的に新たな技術を用い、従来にはない新しいサービスを提供しようとしている。(G)
- 10) 女性の大学卒業生の就職する時が差別される場合が非常に多い。(H)
- 11) 在学生や卒業生の数の増えるとともに、就職の環境が厳しくなることが考えられる。(H)
- 12) EC 化率の高い場合、実施できるプロモーション活動や店舗の雰囲気への実感が限られており、ブランド・エクイティに有利とは言えないと筆者が考えている。(I)
- 13) すなわち、個人主体のキャリア志向の強いため、日本企業で就労の困難性になることがわかる。(L)
- 14) このように IT 企業と従来の金融機関の協力することで、自社を中心に構築されたビジネスエコシステムはどのような新しい顧客価値が生み出す⁴⁾。(G)

いずれも用言と主述関係を構成した上で名詞を修飾しているにもかかわらず、「の」を使用している例である。確かに、例えば、「私の／がすべきことはこれがすべてだ。」のような場合は、「の」「が」とも可能である。「の」と「が」の交替については、その条件について数多くの先行研究があるが、ここでは表れた誤用に即して検討していく。便宜的に「～コト」の連体節を考えてみた場合、9) の「A と B の提携すること」、また、14) の「A と B の協力すること」は従属節であろうと主節であろうと不自然な形である。これは、「[A と B の] 協力すること」という構成ではなく、あくまで「[A と B が協力する] コト」で、主述関係が切り離せないためである。ただし、「A と B の連携した／連携していること」「A と B の協力した／協力していること」は許容度が上がる。既に成立し、状況として捉えられる事柄については所属格が容認されやすいと考えることができる。

それ以外の例「大学卒業生の就職すること」「数の増えること」「EC 化率の高いこと」「キャリア志向の強いこと」「就労の困難になること」は所属格であっても許容される。したがって、10) ~ 13) については、これとは別の交替できない理由がある。

このうち、10) の例については「就職する時が」の部分に誤用があり、「時に」とあるべき所を「が」としている。元は「就職する時が、非常に多く女子学生が差別を受ける時である」という骨子の文に連体修飾節を付随したために文がねじれたか、あるいは、主節の「差別される場合が多い」において既に「が」が連続しているが、さらなる重複を避けるため、連体節内

で「の」を使用した可能性も考えられる。

また、13)-2の「日本企業で就労の困難性になることがわかる」も入り組んだ誤用となっている。理解しやすい文に変えると「日本企業では就労が困難になることがわかる」であろう。あるいは、「日本企業では就労が／の困難なことがわかる」であれば、「の」の使用も可能になる。やはり「困難になる」という動詞よりも「困難な」という形容詞的な語において所属格を容認する度合いが高まると思われる。つまり、どのような連体節であれば主述関係を示す「が」でなければならないか、また、「の」との交替が許容されるかという基準が学習者の中で明確でないことが誤用につながっている。

その他の例は、11) が並列、12), 14) が条件、13)-1 が原因を表す従属節の一部である。主節に組み込まれた連体節と従属節の連体節とを区別して産出できていないのだが、逆に言うと、これは連体節においては基本的に「が」を使用するが、「の」との交替が可能な場合があることを知っているがために生じた誤用ということになる。

ここまで格関係を表す助詞の「誤用」と捉えてきたが、学習者に「が」と「の」の交替が可能であるという理解があり、その基準が不明確であることから構造的に生じた誤用、さらに言えば、正用の混じる誤用は、正確には「混用」と称するべきであろう。

こうした連体節での「が」と「の」の混用を踏まえて、次では「が」と「は」の誤用として挙げた用例から、その使い分けを検討していく。

4. 連体節における「が」と「は」

「が」と「は」の誤用を整理したのが、次の表3である。「が→は」の誤用例は、言うまでもなく多く、主節・従属節を合わせると26例認められた。一方、「は→が」の誤用例は41例に上り、「が→は」の誤用数を上回っている。

表3 学習者別「が」と「は」の誤用数

誤→正	学習者												計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	
が → は				2	2	1		2	4	13	2		26
は → が	2	2	3	3	3	6	6	6	2	3	5		41

4.1 「が→は」

「が→は」の混同には、「は」の特立（とりたて・対比・主題）への不注意もしくは誤解によるものが多く認められる。

- 15) 例えば、日本の場合は食事する際に、ビールを注文する消費者が多い。だが、台湾の消費者があまりビールを注文しない。(J)
- 16) 台湾の地域別の家庭外食支出データを見ると、台北と高雄の間に、大きな差がなかったということが示されていた。(J)

15) の例では、「台湾の消費者」が「日本の場合」と対比的に捉えられているが、この文を単独の文のように扱って、「台湾の消費者があまりビールを注文しないのに対して、日本の場合は食事する際に、ビールを注文する消費者が多い。」という展開の文との間に区別をつけていないように見える。

次の 16) の例は、連体節であるが、「大きな差がなかったということ」のように引用節を含んでおり、「は」の使用が容認される。この場合は「大きな差は」と主題として特立する方が自然であろう。「が→は」については連体節に見られる誤用は多くない。この連体節の誤用例については、次節で例 23) として取り上げる。

4.2 「は→が」

前節で見た「が→は」とは逆の現象が「は」を「が」と混同する場合に見られる。

- 17) また、前述した女性の学生の数が増えていることを合わせて考えると、進学女性の増加率が男性より高く、女性の就業環境が男性より厳しくなった可能性は高い。(H)

「厳しくなった可能性」という主語が何に対して特立されるのか、その条件がないにも拘らず、「は」を使用してしまっている。そのもう一つの波及が、「は」を従属節に不用意に使用してしまうことに見られる。

- 18) これにもかかわらず、中国はすでに高齢化社会に入っていることは言うまでもない。(H)

この例の場合、後の「は」は規則的に使われているが、「中国は」の「は」は正しくない。「中国はすでに高齢化社会に入っている。」なら規則的な使い方だが、それが名詞句となるとき、特立されるのはその句全体であることへの注意が働いていない。この学習者は、「は」の働きに無知なのではなく、誤った別の規則を適用していると考えられる。

一方で、この学習者が連体節内で「が」を使用している例がある。その主なものは次の通りである。

- 19) また、25-29 歳の間の男女の比率の差がより大きいことが分かる。
- 20) 前述した女性の学生の数が増えていることを合わせて考えると、
- 21) 企業が女性を雇用する潜在的なコストがあがった。
- 22) しかし、これらの記事の中に、女性卒業生の就職がより難しいというような報道が非常に少ないだけでなく、常に軽視さらに無視されている。
- 23) 中国の人材不足または人材流出問題が深刻だというような報道は常に見られる一方、女性とくに高学歴の女性に対する雇用の差別が確実かつ多く存在しているのも現実である。

総じて連体節内では「が」が使用されており、この学習者が 18) のように連体節内で「は」を使用する例は稀少である。つまり、基本的な連体節内での「が」の使用は習得されている。

ここで、22) と 23) に注目してみると、22) の例は「[主語 (就職) + が + 形容詞 (難しい)] という + 名詞 (報道)」という構成であるが、続く「報道が」は、「報道は」と主題として特立する方がより自然である。また、23) の例の誤用度は高くないが、「人材不足または人材流出問題は深刻だというような報道が常に見られる一方」のように、ここでは、連体節の「が」を「は」に、主節の「は」を「が」とする方がより自然であろう。というのは、問題となる「報道」にかかる連体節には「深刻だというような」という引用節を含んでおり、「は」の使用が許容される。また、「報道」に後接する「は」は、この節末の「一方」という語によって対比が示されているため、「は」による対比は必要ない。つまり、この学習者は「は」が対比を示すということを理解しており、それを「一方」で受ける文において適用したために生じた誤用であると考えられる。

実は、23) は前述 18) の直前の文であり、18) 冒頭の「これにもかかわらず」の「これ」(正確には「それ」)は 23) の文を指している。この学習者にとって、23) から「これにもかかわらず、中国はすでに高齢化社会に入っている」という展開は必然のものであったのではないか。この特立を重視したことが、連体節内であるにもかかわらず「は」を選ばせた理由ではないかと推測できる。

連体節における「は」の混用は、他の学習者にも次のような例として見られる。

- 24) とはいえ、多様な日本外食チェーン店があるが、店舗数は 50 以上の企業が、わずか吉野家とモスバーガー二軒しかない。(J)

この例もまた、「店舗数が 50 以上の企業は」が正用であり、連体節の「は」を「が」に、主節の「が」を「は」にする必要がある。「店舗数は 50 以上 (で) ある」という「店舗数」を

特立した形をそのまま連体節としたために誤用となっている。連体節内で「が」を使うというルールよりも「は」の特立を重視したように見えるが、あるいは、連体節の係り受けの構造から注意が逸れ、「ゾウは鼻が長い」に代表される「総主語 A は小主語 B が～」の形式に当てはめた可能性もある。これについては、次章でも触れる。

5. 「が」と「を」、「が」と「に」

ここまで連体節に見られる主格「が」と「は」、「が」と「の」の誤用を検討してきた。次に、主格「が」と目的格「を」、及び与格「に」との誤用を考えていく。本来、格の異なる助詞を使用することは考えにくいのであるが、細川 (1993) などでも指摘されているように、特に「が→を」の誤用は少なくない。今回の調査でも「が→を」の誤用は 23 例認められた。

「が→を」「を→が」の学習者別誤用数を表 4 に、「が→に」「に→が」を表 5 に挙げる。

表 4 学習者別「が」と「を」の誤用数

誤→正	学習者												計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	
が → を	2		1	12		1	1	1		1	4		23
を → が						4	1						5

表 5 学習者別「が」と「に」の誤用数

誤→正	学習者												計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	
が → に	1			2				2		1			6
に → が				2									2

それなりの誤用数が認められるが、連体節を構成しているものはそれほど多くないため、ここではそれ以外の主節などに表れる誤用も合わせて取り上げることとする。

5.1 「が→を」「を→が」

「が→を」の混用は、基本的に動詞の自他に関わっている。次の 25) と 26) の例は主節に表れた「が→を」の誤用である。25) は「コストダウン」が「実現し」た内容であり、「を」を取るところであるが、動詞の自他を誤った例と見られる。26) は「(表は) 認知度が低いことを示している」とするのが正用であるが、「(表には) 認知度が低いことが示されている」がむしろ適当であり、受動態に関わる誤用とも見なせる⁵⁾。

- 25) オンライン販売はコストダウンが実現し, XIAOMI 掲示板は顧客価値を創造する重要な手段の1つである。(D)
- 26) 地下水も同じように、素材としての魅力が高いが、認知度が低いということが示している。(A)

このように、述語動詞の自他やヴォイスの理解が不十分であることが「が→を」の混用を招いていると考えられるが、25)の例については、さらに学習者が「が」を選んだ要因を挙げることができる。それは、4.2の終わりでも触れた「総主語 A は小主語 B が～」の形式である。この形式には学習者 F の 27) も当てはまるが、28), 30) ~ 31) に示したように学習者 D にややまとまって見られる。

- 27) 近年の中国人消費者は所得や生活水準上昇によって、逆に私生活が犠牲にしていると気づき, (F)
- 28) XIAOMI は SNS が活用し, ターゲットとなる若者とコミュニケーションし, 顧客のニーズをよく理解し, 毎週無料でソフトウェアのアップデートを実施した。(D)
- 29) 顧客のニーズがよく理解し, 満足される新製品を提供することが非常に重要である。(D)
- 30) デザイナーの役割としては, 各部門の共同作業, 経営者と顧客間のコミュニケーションがうまくできるように, 製品の企画から全体の事業が把握する。(D)
- 31) 1つ目は, 顧客のニーズ, 意見の重要性が意識し, 傾聴することである。(D)

28) では、「SNS が活用し」と「が」が使用されているが、続く「顧客のニーズを理解し」「ソフトウェアのアップデートを実施した」では問題なく「を」が使用されている。このことから、「A は」の直後に来る、格を担う名詞には「が」をつけるというルールを適応しているのではないかと考えられる。その傍証となるのが、続く 29) である。この例は「顧客のニーズを理解し、顧客に満足される新製品を提供することが」が正用である。28) では「ニーズをよく理解し」と正しく「を」が使用されていたが、29) では「が」と混用されている。さらに、後半の「新製品を提供する」では問題なく「を」が使用されていることから、ここではやはり連体節の冒頭に来る名詞を「が」で格表示するというルールを適用していることを窺わせる。一見、恣意的に表れたように見える誤用であるが、これも構造的に表れた混用と見なしてよいであろう。

30) は、例えば「デザイナーの役割としては、…製品の企画から全体の事業までを把握することが挙げられる」のような形が正用であるが、そうはなっておらず、「A は」の後にはやや

機械的に「B が」となる文が置かれている。ここでは何が総主語で何が小主語であるかという文の構造よりも、「A は B が」の形式が優先されているように見える。

また、31) については、動詞の自他の区別に加え、29) と同様に連体節を構成していることも目的格であるにも関わらず「が」を選ばせた要因の一つではないか。学習者 D 以外にも、連体節内の「が→を」には次のような混用例がある。

- 32) 売れる予測がする商品の場合は、メニューの画像も大きくするのである。(J)
 33) そうすれば一次的に技術や市場など競争優位を獲得できるが、独創性が失ってしまう可能性がある。(K)

一方、「を→が」の混用は「が→を」に比べると 5 例と少ない。ここでは、文意不明の 1 例を除く 4 例を示す。

- 34) 90 年代以降インターネットの発達により、アマゾン、楽天など通販を流行となった故、価格競争が始まり、(…中略…)「価格主導のマーケティング」(マーケティング 3.0)の付加価値を求めようになった。(F)
 35) 電化製品は話題となったが、これは現地販売により消費者は直接商品を比較することでブランド力を高まったのである。(F)
 36) 以上の実例を見ると、一回信頼性を失うと回復するのは困難であり、時間やコストをかかると思われる。(F)
 37) 2000 年前後から、インターネットとスマートデバイスの普及、クラウドやビッグデータ等の活用による技術革新により、デジタル時代に入り、様々な新たなサービスを相次いで現れる。(G)

34) は連体節、その他の例は主節に見られる混用例である。34) については、連体節内での「が」の使用が定着していないと考えられるが、それに加えて、「～が流行となる」の自他に誤りが見られる。これは、あるいは「(～が) 流行する」を「流行となる」とした時、格表示が変化すると考え、それを優先させた可能性も考えられる。それ以外の主節に見られる「を→が」の混用も、概ね動詞の自他の区別の問題が集中している。

また、「が→を」の混用例の方が「を→が」より多いのは、上で見てきたように、「が」を選ばせる文法的ルールが複数あり、それを学習者なりに重視していることによると考えられる。

5.2 「が→に」「に→が」

「が」と「に」との混用は、「が」と「を」とのそれに比べ、数自体は少ない。それでも、「に→が」よりも「が→に」の例の方が多い点は、「が」と「を」との混用と同様である。「が→に」の例には次のようなものがある。

- 38) 図 5 が示したように、熊本城は認知度が高いが、新鮮味に乏しいということが推測される。(A)
- 39) 中国のスマホ業界には、激しい競争が直面している。(D)
- 40) デザインを通じて競争優位を創出するため、製品に新たな意味づけをし、顧客は自分のニーズが気づく前に、初となる新製品を提供することが企業に大きな影響を与えられ思われる。(D)
- 41) 女性の大学卒業生の就職する時が差別される場合が非常に多い。(H) *前出 10)
- 42) それぞれの勤め先が違う性質があり、若者たちもそれぞれ自分の個性があるので、いわゆる一番良い勤め先に就職することより、自分に一番似合う勤め先を選ぶことが大事である。(H)
- 43) 日本では、普通、店長育成が 3～4 年をかけた。(J)

これらの内、38) は通常、「(筆者が) 図に示したように」という文脈で用いられるが、「図が(ある事実を) 示している」という見方も理屈としてはあり得る。日本語文における事柄の捉え方の理解が不十分なのではないかと思われる。

学習者 D の 39), 40), および、学習者 J の 43) は、「スマホ業界には」「日本では」のような変則的な場合もあるが、それぞれ「A は」の形が認められ、さらに 40) は連体節を構成している。これらは、前節で見た「が→を」と同様のルールが学習者に適用されたと考えてよいだろう。

学習者 H の 41) は、前出 10) と同じ例である。3.2 でも触れたように、元は「就職する時が、非常に多く女子学生が差別を受ける時である」という文構成と考えられるが、さらに「場合」に収束する連体節と捉えて「が」を使用したとも考えられる。同じ学習者による 42) も連体節内で生じている混用である。もっとも、この例は、続く並列句「若者たちもそれぞれ自分の個性があるので」の述部と同様に「～がある」の形を取っているが、「それぞれの勤め先が違う性質を持ち」であれば、誤用ではなくなる。ここでは「が」の混用例として挙げたが、述部の選択の問題とも捉えられる。

最後に「に→が」の例を挙げる。この混用は一人の学習者に見られる少数例で、いずれも主節に表れている。

- 44) マーケティングの分野において、顧客が製品に求める価値はただ 1 つだけではなく、1 つの商品に複数の価値に認められる。(D)
- 45) 昨年、XIAOMI は出荷台数を大きく落とし、中国の 4 位にランクダウンしたが、中国のスマートフォンメーカーの中に初となる経営戦略がライバル企業に真似した。(D)

44) は、「～に…を認める」の受身形であり、「1 つの商品に複数の価値が認められる⁶⁾」とあるべきところである。二重目的語の格表示に混乱を来したのではないかと、ひとまず考えることができよう。

45) は、3ヶ所ある格助詞がすべて混用されているが、「(ランクダウンしたのは、) 中国のスマートフォンメーカーの中で初となる経営戦略をライバル企業が真似したためである。」という文意であろう。述語動詞「真似した」のヴォイスを変えずに考えると、このように助詞の混用であるが、44) に見た動詞の受身形による混用を勘案すると、別の正用文を考えることができる。すなわち、「中国のスマートフォンメーカーの中で初となる経営戦略がライバル企業に真似されたためである。」である。そうすると、場所格の「に→で」はやはり混用されているが、他の 2ヶ所は正用であることになる。2例のみの検討ではあるが、学習者 D において「に→が」の混用は動詞の受身形と助詞との対応とが関わっており、その使い分けの理解が明確になされていないためと推測することができる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、上級日本語学習者の専門的なレポートの下書きから、「が」を中心とする格関係の誤用例を手掛かりに、学習者が日本語学習を通じて作り上げてきた基準によって、構造的に正用との混用が生じていることを確認してきた。

確かに、誤用について、学習者の母語の干渉は見逃せない要因である。だが、上級レベルともなれば、それまで学習してきた文法知識を基に、学習者個々の産出のためのルールがあっても不思議ではない。ある産出場面において、その学習者にとって明確でない部分のルール同士が重複したとき、どのルールを適応させ、優先させるかが学習者によって異なっているのではないか。そのため、ある誤用パターンを一部の学習者が繰り返すという形となって現れるのであろう。つまり、こうした誤用は、学習者の内部で形成された、正用とは別の規則を適用するという構造的な要因によって起こるのである。

今後は、連体節以外の連用節など、更には文全体の構文の中でも、格関係の誤用について同様の問題が認められるかどうかについても検討していきたい。

謝辞

Lee 風子先生には、立命館大学言語教育情報研究科の在籍時はもとより、その後も指導いただきました。深謝申し上げます。

また、本稿執筆にあたり、論文の下書き使用を快諾してくださった「アカデミックライティング」2016年度後期受講の院生諸君にも感謝申し上げます。

<注>

- 1) 下線部の正用は「そのものにお湯を注ぎ」であり、「で」の使用にも問題があるが、ここでは「を→に」の部分のみを取り上げる。
- 2) 迫田 (2001) では、「に」は位置を表す名詞、「で」は地名や建物を表す名詞という、学習者のユニット形成が指摘されている。ここでの「を」と「に」の使い分けもユニット形成の1例と考えられる。
- 3) 正用4例のうち1例は、研究対象である企業のHPにおける記載を参考にした可能性がある。
- 4) 「どのような」以下は誤用であるが、適当な修正ができなかったため、原文のまま示す。
- 5) 細川 (1993) では、「が→を」の誤用が生じた例の述語動詞の可能形と紛れやすいことに着目し、「を→が」の誤用例には、述語の形式が受身や可能である場合が多いことを指摘されている。
- 6) 「認められる」は「求められる」が適当か。

<参考文献>

- 細川英雄「留学生日本語作文における格関係表示の誤用について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5, 1993, pp.70-89
- 川口良「予備教育中上級日本語学習者の作文にみる誤用」『横浜国立大学留学生センター紀要』2, 1995, pp.30-43
- 益岡隆志 (1997)「文法の基礎概念 1」益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏『岩波講座日本語の科学 5 文法』, pp.41-78, 岩波書店
- 三上章 (1969)『象は鼻が長い 日本文法入門』(改訂増補版), くろしお出版
- 野田尚史 (1996)『「は」と「が」』くろしお出版 新日本語文法選書 1
- 坂口昌子「日本語学習者の作文データ分析を通してみた格助詞『を』の誤用傾向——『を』と『が』の交代を中心として——」『日本語・日本文化研究』(京都外国語大学留学生別科) 10, 2003, pp.9-19
- 坂口昌子「日本語学習者が生成する格助詞『が』・『を』の誤用とその訂正について——作文データからみた母語別誤用傾向」『研究論叢』(京都外国語大学) 63, 2004, pp.65-75
- 迫田久美子 (2001)「学習者の文法処理方法 学習者は近くを見て処理をする」野田尚史・迫田久美子・渋谷克己・小林典子『日本語学習者の文法習得』, 第2章, pp.25-43, 大修館書店
- 沈衛傑「中国語話者の作文に出現した『に対して』の誤用分析」『一橋大学留学生センター紀要』12, 2009, pp.41-57
- 田中章夫 (1977)「助詞 (3)」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』, pp.359-454, 岩波書店
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタックスと意味Ⅰ』, くろしお出版

On the Misuse of Case Relations in Papers by Advanced Japanese Language Learners

Yoko Nakashima *

Abstract

This paper considers the misuse of verbalism found in advanced level Japanese learners as a misuse that is structurally manifested from the grammar rules formed by learners. From this point this research analyzes the misuse of case relations involving the case particle “ga (が)” seen in the drafts of academic papers.

The results are as follows. 1) The misuse relating to “ga (が)” and “no (の)” should be regarded as grammatical confusion. It is thought that the knowledge that it may be replaced causes this confusion. 2) In the misuse between “ga” and “ha (は)”, there is more misuse of “ha (misuse) → ga (correct use)” than “ga → ha”. It could be that there are many cases where “ga” is misused due to carelessness or misunderstanding of “contextual prominence” represented by “ha”. In addition, there is a possibility that the sentence pattern of “total subject ‘ha’ sub subject ‘ga’ ~” may be incorrectly selected. 3) Misuse between “ga” and “wo (を)” are related to the selection of the intransitive verb or transitive verb of the predicate and voices. For “ga → wo”, it is thought that “total subject ‘ha’ sub subject ‘ga’ ~” form may cause grammatical confusion, too. In addition, its use within an attributive clause may be in the excessive use of “ga” even for the objective case. 4) The case of “ga → ni (に)” is seen in attributive clauses. As for “ni → ga”, the misunderstanding concerning the replacement of the particle in the case of the passive form is considered to be a factor causing confusion.

In this way, it can be judged that misuse is occurring due to the structural factor of the incorrect application of one of the rules that an advanced learner has mastered.

Keywords:

advanced Japanese language learner, academic writing, case particle, case relation, grammatical misuse, grammatical confusion, attributive clause

* Part-time Lecture, Ritsumeikan University